

## 環境保全型農業による酒米生産に取り組む

### 兵庫県多可町中区坂本地区における環境意識

矢嶋 巖

#### 1. はじめに

これまで日本では、地域活性化のために、地域経済や地域社会を成立させてきた産業にさまざまな働きかけが行なわれてきた。農業もその重要な対象の一つであった。とくに日本の農業と最も重要な産物である米を生産する稲作を取り巻く環境は、需要の減退と米価の低迷、小規模経営による非効率性、農業人口の著しい減少、農業者の高齢化の進展のもとで、ますます厳しさを増している。

その中であって、酒米<sup>1)</sup>の栽培面積は米全体の栽培面積の1%程に過ぎず、食用米を中心とした日本の稲作においては主要な存在とはいえない(横尾 2009、p.38)。しかし、安定した消費者(日本酒メーカー)を有し、かつ、一般の食用米よりも概して高値で取引される存在である。そのため、付加価値の高い酒米の生産が農家に相対的に高い所得をもたらす可能性があるとともに、結果としてさまざまな作用を農家や酒造業者、地域経済へもたらしうると思われる。伊賀(2008)は、酒造会社と酒米生産者の提携関係を、近接する主体者間による取引がおこなわれ独自の価格形成・保証システムを有する食糧供給のあり方としてのショートフードサプライチェーンの例として位置づけて事例研究をおこない、酒造業者や農家による働きかけのほか、自然食品のネットワークや生産地域内の近隣関係が各主体を結びつける役割を果たし、そうした提携がさまざまな作用を生じさせるとした意義を示している。そして、こうした作用により生じたいくつかのショートフードサプライチェーンの緩いネットワークの結合によって地域を活性化させることで、生産調達のリスクの分散につなげていくことが必要としている。言い換えれば、こうして生じたネットワークにより活性化することで、地域へよい波及効果をもたらしうるといえよう。その際には、より広いネットワークを生じうるような、より高付加価値の酒米生産が鍵となると思われる。

酒米によって生産される日本酒については、松田(1989、pp.67-68)や国税庁課税部酒税課(2010)のホームページ掲載データによれば、1990年代後半をピークとして日本における酒全体の消費量が減少に転じたが、日本酒の消費は1970年代半ばから減少し続けている。1980年代後半の地酒ブームのなかで日本酒の消費の落ち込みはいったん緩やかになったものの、ブームが過ぎると、バブル崩壊と平成不況も相まって、日本酒の消費量は落ち込み、現在に至っている。

その一方で、日本酒の高級化が進展してきた。級別制が廃止された1992年以降、とくに中小の日本酒メーカーは特定名称酒とよばれるより高付加価値の日本酒を生産することにより、生き残りを図ろうとする傾向が強まってきているとされる(伊賀 2008、p.154)。国税庁課税部酒税課(2010)のホームページ掲載データによれば、特定名称

酒の中でもより付加価値が高い純米酒・純米吟醸酒の生産量の減少が小さいのに対して、一般酒（非特定名称酒）や一定量の醸造用アルコールを添加している特定名称酒である本醸造酒の生産量の落ち込みが大きい。こうした状況を受けて、酒米の生産も減少しつつある。

酒米の生産はかつては兵庫県や北陸地方、中国地方といった特定の産地に限られていたが、1992年以降の中小メーカーを中心とした特定名称酒の生産増加に伴い、酒米の生産県が増加し、産地品種銘柄数が増加するなど、酒米生産においては地域多様化がみられるという（伊賀 2008、pp.154-155）。現在、吟醸酒用の酒米の中で最良の品種とされているのは山田錦である（小泉監修 2000、pp.98-99）。国税庁が毎年おこなっている全国新酒鑑評会の出品が、山田錦の使用割合に応じて第Ⅰ部（山田錦の使用割合が50%以下）と第Ⅱ部（同50%超）に分けられ、かつ第Ⅱ部の出品が大半となっているという事実に象徴されるように（酒類総合研究所 2009）、新酒鑑評会に出品するような高級酒において、山田錦が原料酒米の筆頭として位置づけられているとあってよい。

横尾によれば、農林水産省の品種別栽培面積の統計に基づく1956～2005年に栽培された酒米品種ごとの面積では、山田錦が23.6万haで第2位であり、全ての酒米品種のなかで約25%を占めている<sup>2)</sup>。2005年度の山田錦の栽培面積は全ての酒米品種の中で最大であり、32%を占め、そのおもな栽培県は兵庫県とされる（横尾 2009、p.41）。横尾と東条山田錦冊子編集委員会編（2006、p.212）の数値から、2005年における全国の山田錦の栽培面積のうち、兵庫県が8割弱を占めると推測される<sup>3)</sup>。

山田錦は兵庫県立農事試験場において1923年に交配で生まれた酒米品種で、1936

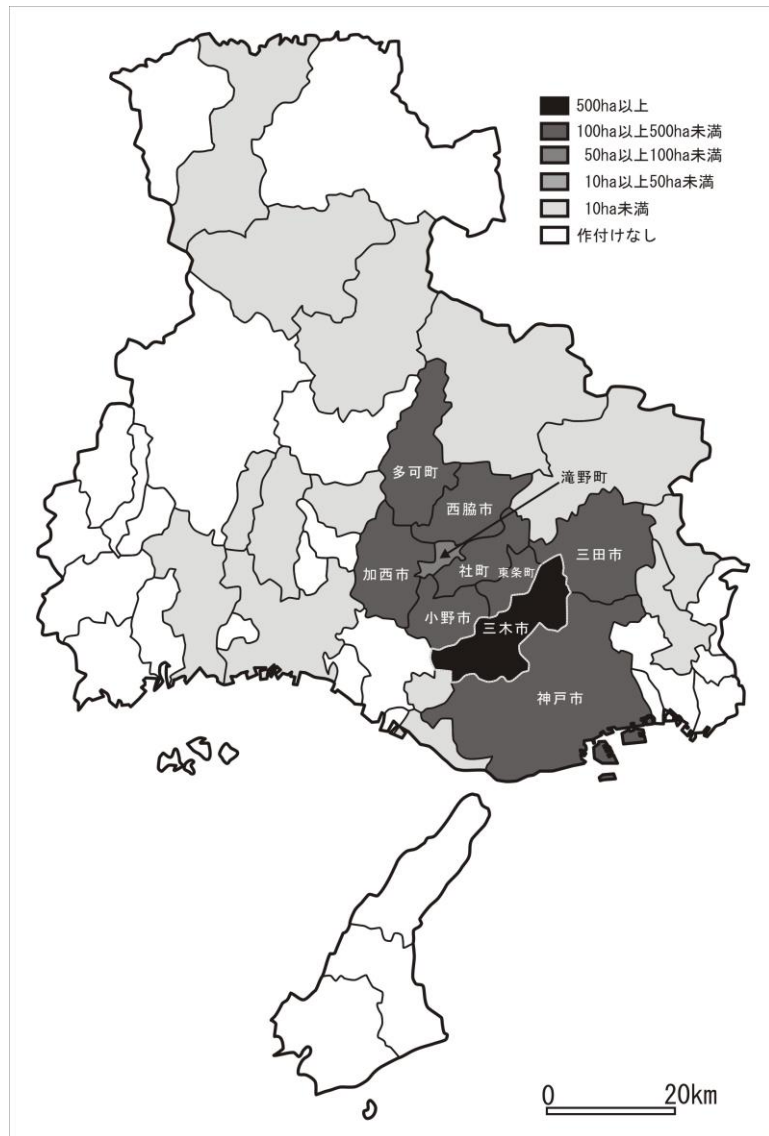


図1 兵庫県における山田錦の作付市町(2005年度)

注 10ha以上の面積が作付された市町には名称を付した。

資料 東条山田錦冊子編集委員会編（2006、p.212）より矢嶋作成。

年に山田錦と名付けられ、県により栽培が奨励され、兵庫県を中心に生産が行われてきたのである（池上 2008、p.25）。図 1 に示されるように、山田錦の生産地域は兵庫県南東部である。殊に旧吉川町（現三木市）、旧東条町（現加東市）の全域と、三木市口吉川町・小野市・旧社町（現加東市）の一部地域は、1964 年以降、山田錦生産地域のなかでもいわゆる「特 A 地区」とランク付けされ、当該地域で生産された山田錦には高い評価がなされ、とくに高値で取引されてきた（橋本 2008、pp.100-101）。

日本酒の原料としての酒米生産地を成り立たせるためには、日本酒の消費量の増大とともに、生産される日本酒の高付加価値化も必要である。また、酒米の生産を地域活性化の方策の一つとして位置づけていくためには、日本の農業が抱えている問題を克服していくこととともに、生産される酒米の高付加価値化が必須である。

兵庫県産山田錦、とくに「特 A 地区」産を筆頭とする市場取引価格が高いブランド酒米を原料に用いることにより、日本酒の付加価値をさらに高めることが可能であるが、有機農業などの環境保全型農業により安全性に配慮して生産された酒米を原料として用いることも、重要な手段の一つとして挙げられよう。一方で、新たに開発された地場産米や、メーカーが直接栽培した酒米や、契約した農家が生産した酒米を原料に使うことで、高付加価値化に取り組む例も見られる。

ここで、環境保全型農業の取り組みについて考えたい。地域活性化の取り組みとして、有機農業などの環境保全型農業が有する可能性についての指摘がある。宮地(2007)は日本における有機農業について、環境保全型農業を視野に入れて、その展開について概観している。これによれば、日本では 1960 年代後半から社会運動の一つとして有機農業が展開してきた。そしてそれは農民運動にとどまらず、産地と消費者の提携の上での取り組みであったという。そして、1980 年代には、流通事業者が有機農業への関わりを深め、減農薬運動が広がりを見せたほか、地域おこしとして有機農業が取り込まれたり、有機農業への敷居を低くするような技術開発が行なわれるといったように、市場の有機農産物への需要の高まりを満たすような動きが見られてきたという。これについて宮地は、1980 年代半ば以降において農産物市場開放が進展する中で、市場競争が激化し、有機農業を選択する生産者や産地がみられたとしている。そして、こうした状況下で、農林水産省が有機農産物についての認証制度を確立、厳格化させ、食材の安全性の保証を行なうようになった。そして、1990 年代以降における農業関連の法整備の中で、環境保全型農業が自然循環機能の維持増進につながるものとして評価され、2000 年に始まったエコファーマー制度といった環境保全型農業振興策が制度化されてきたという。ただし、国による支援は不十分で、都道府県や市町村による振興策が同時に進められてきたという。

神戸学院大学地域研究センター地域社会学分野では、全国レベルの高級ブランド酒米である山田錦の、有機農業を含む環境保全型農業による生産のために、営農組合を結成して取り組み、できあがる酒米の高付加価値化によって、酒米産地としての生き残りを図っている兵庫県多可町中区坂本地区において、営農組合に所属して環境保全型農業へ取り組む生産者と、営農組合に属さない農家および一般住民（非農家）に対して、地域環境や環境保全型農業に対する意識について、アンケート形式の調査票による面接聞き取り調査を行なった。これに基づいて、農家と一般住民の環境保全型農

業への取り組みへの意識について考えるとともに、環境保全型農業による地域活性化のための今後の課題について考察を行なう。

これにより、混住化や農作業の請負化が進む中で、環境保全型農業に取り組む農家のモチベーションや、環境保全型農業がおこなわれる地域の一般住民の認識などが明らかにされ、酒米山田錦の環境保全型農業による生産に基づく地域活性化の可能性と問題点が示されることが期待できる。

## 2. 兵庫県多可町中区坂本地区の概要

本研究で取り上げる坂本地区は、2005年11月に中町、八千代町、加美町が合併して成立した兵庫県多可郡多可町中区に属する大字で、合併までは多可郡中町の大字であった。図2に示したように、多

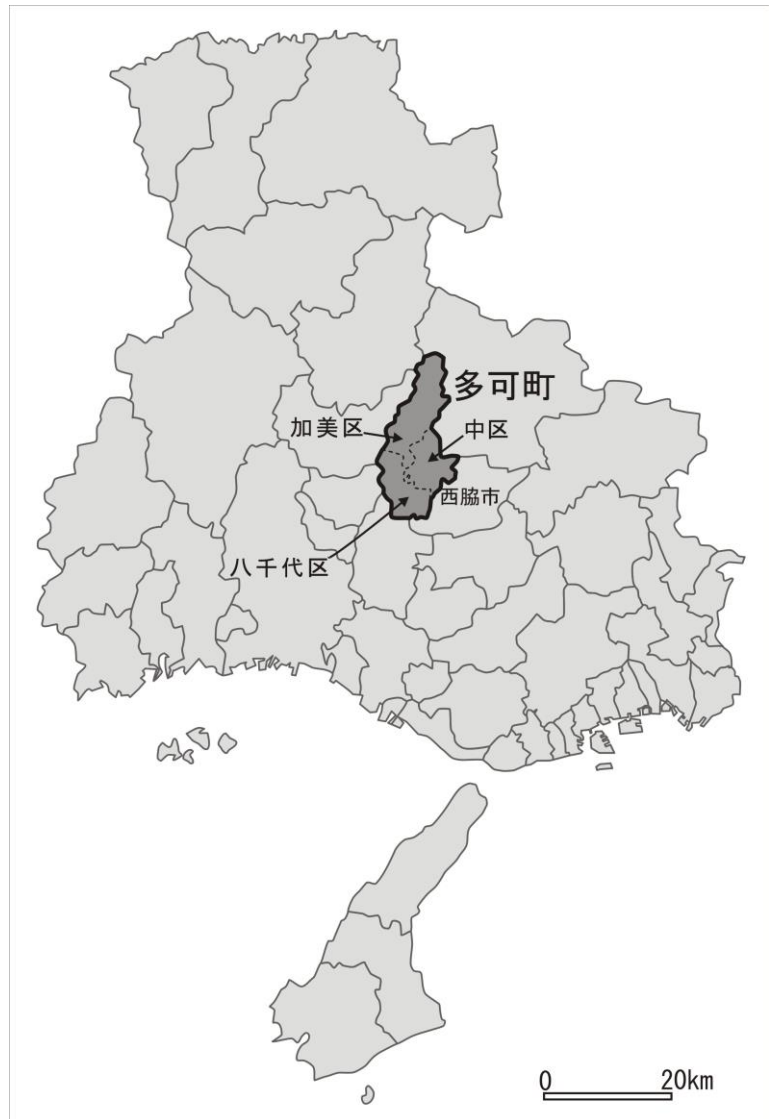


図2 兵庫県多可町の位置

可町中区は兵庫県のほぼ中央部のやや南東に位置し、地形的には中国山地東端、播但山地の南側に位置する。おおむね一級河川の加古川の一次支川である杉原川の流域にあり、比較的広い平地が広がり、北方の標高約693mの妙見山、東・西・南方の標高200~500m程度の低山地に囲まれている。坂本地区の集落は中区南部の杉原川右岸に位置し、杉原川が形成した広い谷底平野へ広がる扇状地上の標高90~100m付近に位置している（石田・落合・田中・八木監修 1994, p.191；中町史編集委員会編 1991, p.530）。

多可町に隣接する西脇市に位置する気象庁観測所のデータによれば、1979~2000年の年平均降水量は1448.5mmである。図3に示されるように、降水は6月、10月に多く、西脇の気温の年較差が神戸・姫路のそれに比べて大きく、石田・落合・田中・八木監修（1993, p.191）にも記されているように、旧中町（中区）は降水量の点では瀬戸内側の気候で、気温は内陸的傾向を示すといえる。

図1に示されるように、多可町は山田錦の生産地域の一つで、2005年度の山田錦の作付面積は約267haで、中心的な生産地である三木市や東条町、社町に比べると少な

いが、兵庫県においては有力な産地の一つである。多可町のなかでも中区が山田錦の生産の中心で、中区には山田錦の母親である山田穂とよばれる酒米の発祥地の一つとされる安田地区が位置する。旧中町は、山田錦発祥の地を自認し、地域として山田錦の生産に取り組んで日本酒に関するさまざまなイベント実施していた。こうした取り組みは現在でも多可町に引き継がれており、多可町も山田錦の生産を産業の基軸

として認識している。具体的には、多可町総合計画（2007年）の産業振興策の章の農業の取り組みについての記載の中で、「今後は、水稻に加え、大豆、麦等の作物を集団転作において連携し、従来から培ってきている有機農業の推進や酒米山田錦の発祥の地として、付加価値の高い農産物の生産を図りながら、安全・安心の農産物を提供する農業政策を推進していく必要がある」としており、有機農業と酒米山田錦の生産が、今後の多可町での農業振興策における重要な鍵と位置づけられていることがわかる。一方で、多可町総合計画では、地場産業<sup>4)</sup>の取り組みの記載として、「酒米山田錦発祥の地として、出荷先の酒造業者と連携して地場産米を使った清酒を商品化している集落もありますが、村米制度（注書き：より良い酒米を求めて、農家と土づくりから共に研究し、その村の米をすべて買い上げる方法）で結ばれている集落はまだ少ない状況で、今後取り組みを広げていく必要がある」としていて、酒米の地産地消の取り組みも今後の課題として示している。

坂本地区は、山田錦発祥の地とされる安田地区にほど近い集落である。聞き取りによれば、2009年の集落戸数は67戸で、農家はそのうち24戸である<sup>5)</sup>（図4～6）。さらにそのうちの19戸によって坂本営農組合が構成され、山田錦や黒大豆の生産、山田錦農業加工品の生産が行なわれている。坂本地区についての詳細については別章に譲る。

坂本地区では古くから酒米の生産が行なわれてきたが、1960年から石川県金沢市の酒造会社である福光屋との間で山田錦の取引が始まり、その後は同社を主要出荷先として酒米山田錦を生産してきた。1996年度まで慣行の普通栽培によって山田錦が生産されてきたが、福光屋酒造が出荷される酒米の品質劣化を坂本地区側に伝え、環境保全型農業による酒米生産を提案した。これに対応して、坂本集落では1997年度から減農薬・有機肥料使用による環境保全型農業に取り組むようになった。また、福光屋か

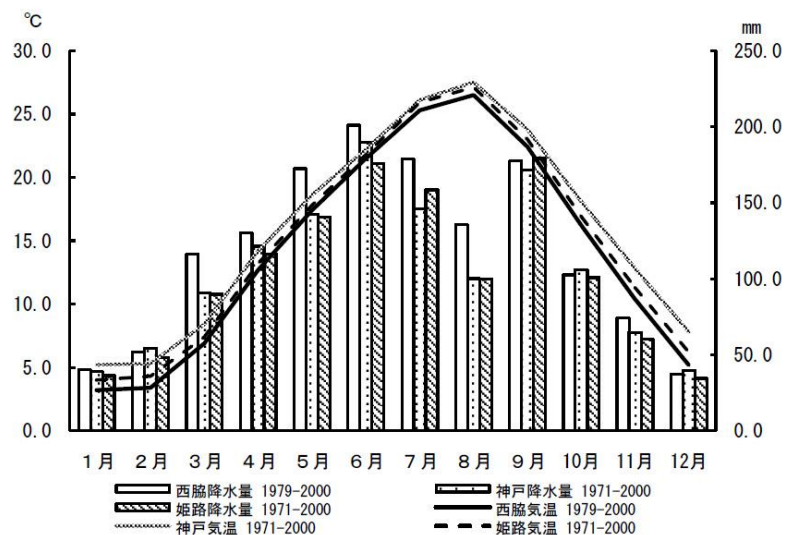


図3 兵庫県西脇市、神戸市、姫路市の気温と降水量

注：西脇市は1979-2000年の、神戸市・姫路市は1971-2000年の気象平年値を示している。

出典：気象庁ホームページ気象統計情報掲載データ。



図5 1972年頃の坂本付近

資料 国土地理院発行25000分の1地形図「中村町」1972年測量

らの要望で、2006年からは一部の水田でJAS有機栽培に取り組み始め、現在まで栽培面積を増加させてきている。また、転作作物として、黒大豆の生産も増やしてきている（兵庫教育大学・兵庫県北播磨県民局 2006、p.26；坂本区および坂本組合からの聞き取り<sup>6)</sup>による）。

坂本地区では、営農組合による環境保全型農業への取り組みを確実なものとするために、2007～09年度にかけて、兵庫県による環境創造型農業の推進のための補助事業



図6 2001年頃の坂本付近

資料 国土地理院発行25000分の1地形図「中村町」2001年修正測量

において、大規模実践地区の一つとして補助対象となった<sup>7)</sup>。この事業による補助の支給は、環境シンボルとなるような生物が地域内に確認されることや、定期的に生物の現況調査を行なうことが条件となっている。坂本地区では、兵庫県レッドデータブックに掲載されているモリアオガエルが見つかり、環境シンボルとなった。なお、この事業では環境保全型農業を環境創造型農業と表現し、坂本地区でもこの用語が使用されていることから、この調査では環境保全型農業を環境創造型農業と読んで実施し

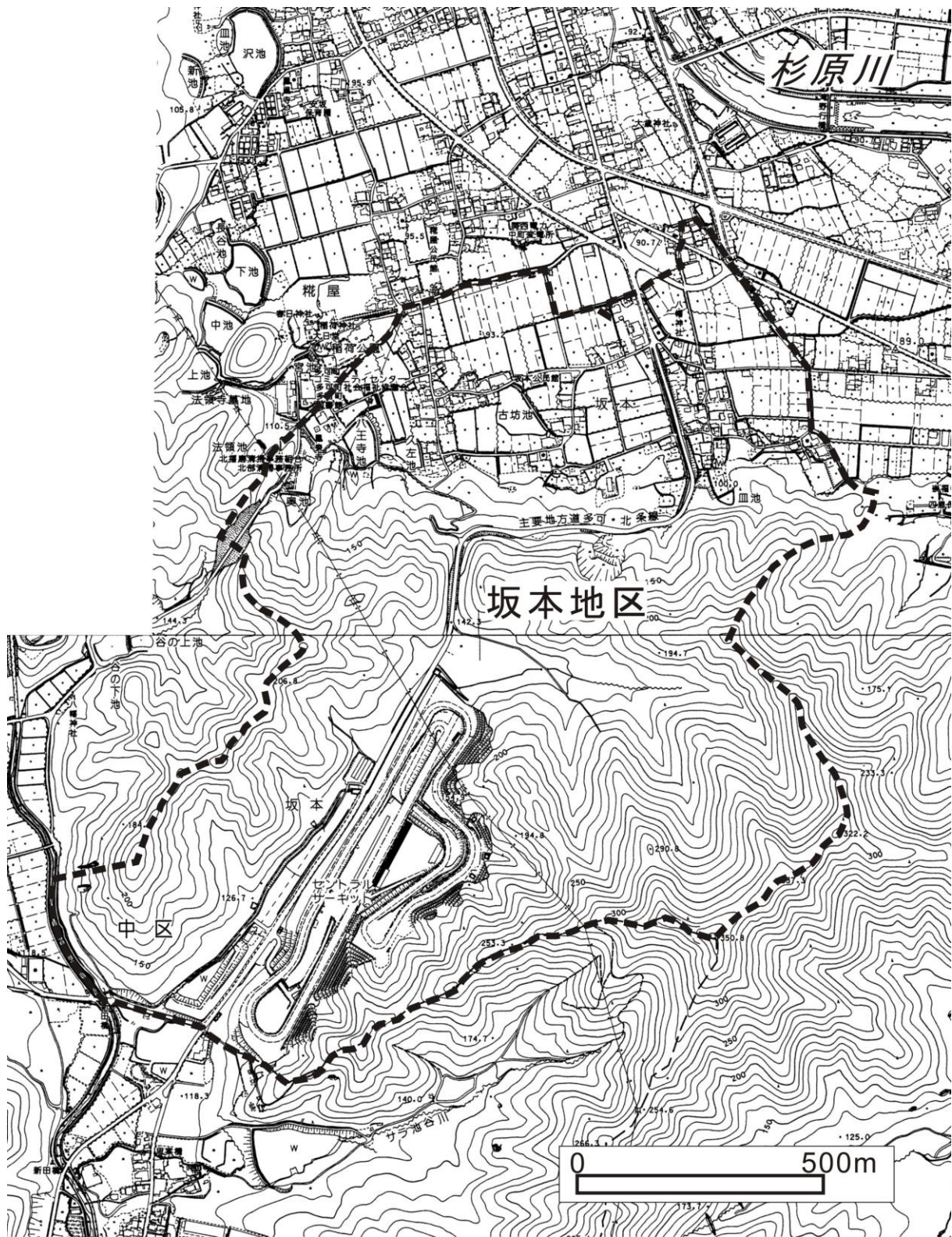


図6 多可町中区坂本地区の概観

資料 多可町1万分の1地形図。



た。

奥平編（2001、pp.252-255）、福政宗物語編集委員会編（1987、p.156）、福光屋ホームページ、福光屋への聞き取りによれば<sup>8)</sup>、同社は石川県においてとくに高いシェアを持つ北陸地方有数の酒造会社で、1980年代半ば以降は特定銘柄化を進め、1986年には全商品を本醸造規格以上とした。2002年には純米蔵宣言を行ない、生産する全ての日本酒を純米酒に切り替え、現在に至っている。近年では減農薬栽培あるいは有機栽培酒米を原料とした高付加価値の日本酒生産に力を入れ、早くから取り組みが行なわれてきた坂本を中心とする多可町の山田錦を筆頭に、豊岡市出石地区のフクノハナ、長野県木島平の金紋錦、富山県福光町の五百万石といった酒米の原料を使用した日本酒のラインナップを、同社高級酒として前面に押し出している。

同社の社史である『福政宗物語』では、巻頭に詩人で金沢工大の宮崎正明氏が寄せた「福政宗酒紀行」が40ページを占め、杜氏の里である丹後・越前、酒蔵のある金沢市石引、そして酒米山田錦の産地である坂本が旅先として描かれている。そこでは、山田錦の由来、同社と坂本地区の出会いや、高品質の山田錦を生産するための同社と坂本地区の協力などについて記されている。現在、兵庫県産山田錦は、全国各地の酒造会社で高級酒の原料として広く使用されているが、かつて兵庫県産山田錦は県外への出荷が厳しく制限されていたとされる。高品質の日本酒を生産できる酒造好適米とされる山田錦は、その供給量の少なさもあって、酒造家に渴望される存在であった。その山田錦を同社に安定的に供給し、同社とともに品質の向上にも取り組んできた坂本地区は、同社にとって極めて重要な位置づけをされてきたといえる（橋本 2008、p.105；福政宗物語編集委員会編 1987、pp.5-44）。

### 3. 環境保全型農業に取り組む地域の意識

#### (1) 本調査の実施概要

この調査は、坂本地区の営農組合に所属して環境創造型農業へ取り組む農家や、営農組合に属さない農家と一般住民（非農家）に対して実施したものである。内容が一部重複するアンケート形式の調査票を2種類用意し、神戸学院大学人文学部人文学科の3年次配当科目人間環境学演習Ⅱ（矢嶋ゼミ3年次生）の2009年度履修生のうちの13名が2～3名ずつ組み、2009年8月9～11日にかけて、面接聞き取り方式で行なった。調査内容については、営農組合に所属する農家に対して、環境創造型農業への取り組みや意識、地域環境についての考えを聞いた。また、営農組合に属さない農家と一般住民（非農家）に対して、坂本地区における環境創造型農業に対する意識や、地域環境についての考えを聞いた。

なお、調査票は、筆者と神戸学院大学地域研究センター地域社会学分野研究員の太田美帆氏が作成した。また、自由記述のテキスト化は、神戸学院大学人文学部人文学科人間環境学演習Ⅲの2009年度履修生（矢嶋ゼミ3年次生）14名が行なった。

#### (2) 多可町中区坂本地区の坂本営農組合加入農家における環境創造型農業と地域環境への意識

### 1) 調査の実施概要

本調査では、坂本営農組合加入農家 19 戸のうち、15 戸に聞き取りを行なった。

### 2) インフォーマントの属性

まず、インフォーマントの属性については表 1 の通りで、高齢者層への聞き取りが中心である。また、聞き取り対象者の性別は、男性 13 名と、男性と女性 1 名ずつの組み合わせが 2 件であった。

### 3) 環境問題に対する意識

環境問題に対する意識を尋ねた。表 2 に示されるように、ほとんどのインフォーマントが環境問題に関心を寄せていることがわかる。

### 4) 地域の環境問題のイメージ

地域の環境問題としてイメージされるものを 3 つまで選んでもらった。表 3 に示されるように、棚田保全やため池保全、獣害、ごみ問題を選んだインフォーマントが多い。この理由として、多可町の加美区岩座神地区の棚田が日本棚田百選に認定されていること、坂本地区においてため池の水質が問題となり水質改善のための取り組みを行なったこと、地区において獣による農作物の被害が発生していること、多可町がごみ分別に力を入れて取り組んでいることから、ごみ問題のような身近に感じられる地域環境問題が高い割合を示したものと想定する。他方で、川の水質汚濁や里山荒廃、人工林放置といった、坂本地区の周辺環境を選択したインフォーマントが少なかったことを指摘したい。

### 5) 坂本地区におけるモリアオガエルの棲息について

表 4 に示した通り、坂本地区におけるモリアオガエルの棲息については、大半のインフォーマントが認識していた。

表 1 聞き取り対象者の年齢

カテゴリ	件数	割合 (%)
30 歳代	1	6.7
40 歳代	0	0.0
50 歳代	3	20.0
60 歳代	2	13.3
70 歳代	4	26.7
80 歳代	3	20.0
その他 (注)	2	13.3
合計	15	100.0

注：男性 40 歳代と女性不明、男性 70 歳代と女性 60 歳代の 2 組である。

表 2 環境問題への意識

カテゴリ	件数	割合 (%)
とても意識している	8	53.3
意識している	6	40.0
あまり意識していない	1	6.7
合計	15	100.0

表 3 地域の環境問題へのイメージ

カテゴリ	件数
ごみ問題	10
川の水質汚染	5
ため池保全	13
里山荒廃	2
人工林放置	1
獣害	10
生種の種類の減少	1
ゲリラ豪雨	4
棚田保全	0
その他	1
何もイメージしない	0

#### 6) 日頃環境のために心がけていること

日頃環境のために心がけていることについて、「はい」か「いいえ」で選んでもらった。表 5 によれば、日々の生活の中での環境のための取り組みを行なおうとするインフォーマントの意志が感じられる。

その他として、「必要最低限の食物で生活し、

表 4 坂本地区におけるモリアオガエルの棲息について

カテゴリ	件数	割合(%)
知っている	12	80.0
知らない	3	20.0
合計	15	100.0

表 5 日頃環境のために心がけていること

カテゴリ	はい	いいえ	無回答
ゴミの分別を行う	14	1	0
冷暖房や家電製品、ガスなどをこまめに消す	13	1	1
洗剤の使用量を減らす	8	5	2
生ゴミを土に返し、堆肥化する	12	3	0
余分なレジ袋をもらわない	11	2	1
バスなど公共交通機関を利用したり、車の同乗を心がける	2	12	1
エコマーク製品や再生紙などリサイクル商品を利用する	9	4	1
環境保護団体などの活動に参加したり、寄付したりする	4	9	2
その他		1	
とくに何もしていない		1	

自分のものは自分でつくり、除草剤を使わずに自分で草取りをする」という回答があった。

#### 7) 食の安全について

食の安全について、関心を持つ事柄について尋ねた。表 6 によれば、食育に対する強い関心があることがわかるが、それ以外の食の安全についての項目には、関心が高いとはいえない。

その他として、「(筆者注：肉類ではなく)魚類中心の食生活を送っている」、「輸入食品への危険性を感じる」といった回答があった。

表 6 関心を持つ食の安全に関することがら

カテゴリ	件数
オーガニック(有機)食品	6
原産地	5
残留農薬	5
食育	15
食品添加物	8
食品廃棄	2
スローフード	2
生産者表示	6
地産地消	6
その他	2
特になし	3

## 8) 山田錦の環境創造型農業の坂本地区への影響

表 7 山田錦の環境創造型農業をおこなうことによる坂本地区への影響

カテゴリ	はい	いいえ	変わらない	無回答
環境創造型農業により、住民の健康への心配が少なくなると思う	13	1	1	0
環境創造型農業により、田んぼやその周囲で有益な生き物(昆虫・鳥・動物)が増えると思う	14	0	0	1
環境創造型農業により、坂本地区周辺の山や川で有益な生き物(昆虫・鳥・動物)が増えると思う	11	2	1	1
環境創造型農業により、住民が地域の自然環境について考えるきっかけになると思う	12	0	1	2
環境創造型農業により、山田錦による収入が増えて坂本地区が豊かになると思う	4	8	0	3
環境創造型農業により、坂本地区に農業後継者が生まれると思う	6	5	1	3
環境創造型農業により、坂本地区の知名度が上がると思う	13	0	0	2
環境創造型農業により、坂本地区の住民の間で、地域のために活動したいという気持ちが起こると思う	11	1	1	2
環境創造型農業をしない場合と比べ、坂本地区では住民と役場の話し合いが増えると思う	13	0	0	2
その他	2			

山田錦の環境創造型農業を実施することによる坂本地区の環境への影響について尋ねた。表 7 に示されるように、環境創造型農業が健康や自然環境へ良い効果をもたらすとしている人や、知名度の向上や地域活動の活発化、役場との連携などの社会的効果についての可能性を高く評価するインフォーマントが多く見られる。しかし、収入の増加や後継者の出現といった現実的な効果については、多くのインフォーマントが厳しい評価をしていることがわかる。

## 9) 坂本地区における環境創造型農業の取り組みについての考え

坂本地区における環境創造型農業の取り組みについて、日頃から思っていることについて尋ねた。

「除草剤が使えないから草ぬきが大変。隣の有機栽培の人が大変そう」、「国の減反政策などで、黒豆を作る。有機では田んぼの 3 分の 2 を大豆に固定しているが、特別栽培米を交互にすればいけるのでやっている」、「この取り組みに対しては苦ではない」、「安心して食べられる（特に米）」、「同じように有機栽培をしたい気持ち

はあるけれども、ここの土の質が粘土質ではなかったのので、一回挑戦してはみたけれども、同じようにはいかなかった。今は、周りの人と同じように特別栽培をしている」、「いいと思う」といったように、環境創造型農業へ前向きな評価をしているインフォーマントの声があった一方で、「面積確保が大変である。農業だけでは、家計を支えられないので、定年後の仕事が終わった人に有機栽培を伝えていけば、農業に集中することができる」、「仕事との両立は手がかかるため大変である。普通の田んぼと有機の田んぼは見た目が違う」、「収穫量を増やしたい」、「リーダーシップを取ってくれる人や後継者を育てていかんと」、「半ば強制的であり、できれば普通にやりたい。有機栽培は大変であり、兼業ではできない。助成金がなければやっていけない」

表 8 環境創造型農業によって増えると思われる有益な生き物

カテゴリ	件数
アメンボ	4
イトミミズ	6
イナゴ	8
カエル	7
カゲロウ	1
カマキリ	2
クモ	7
ゲンゴロウ	3
タニシ	6
テントウムシ	3
ヒル	4
トンボ	4
バッタ	6
ホタル	7
ユスリカ幼虫	4
ドジョウ・サワガニ	1

表 9 環境創造型農業に取り組む理由

カテゴリ	はい	いいえ	なし・わからない	最も重要なカテゴリ
ご自身が有機農業などの環境創造型農業に取り組んでみたかったから	6	7	2	0
有機農業などの環境創造型農業に取り組むことによって坂本地区やその周辺の自然環境をよくしたいから	12	2	1	4
補助金が出るからから	8	6	1	0
米が高く売れるから	5	8	2	0
みんながやっているから	6	8	1	1
次の世代に農業を継いでいって欲しいから	10	2	3	2
エコファーマーと名乗ることができるから	7	4	4	0
坂本地区の活性化のきっかけになるから	11	3	4	4
その他	1			2
該当なし				2

表 10 環境創造型農業の取り組みにおける実感

カテゴリ	はい	いいえ	変わらない	わからない・無回答	「はい」の場合		
					そのことは不満である	そのことは不満ではない	無回答
収穫量が減った	9	1	4	1	2	5	2
除草の手間が増えた	11	0	3	1	7	4	0
田んぼの害虫が増えた	5	1	6	3	3	2	0
鹿や猪などの害が増えた	12	2	0	1	8	3	1
堆肥やEM購入の費用が増えた	8	1	3	3	3	4	1
必ずしも儲かっていないと感じる	10	0	1	4	2	6	2
地区住民の理解や協力が得られていないと感じる	3	11	1	0	0	2	1
有機栽培などの環境創造型農業に対する県や町による経済支援が不十分であると感じる	8	4	0	3	4	3	1

といったように、地域としての取り組みに対する厳しい評価や、作業が大変であること、収穫量が伸びないことを語ったインフォーマントも見られた。

#### 10) 環境創造型農業によって増えると思われる有益な生き物

8)の設問で、環境創造型農業により、田んぼやその周囲で有益な生き物（昆虫・鳥・動物）が増えると思うとしたインフォーマントに、どのような生き物が増えると思うかを尋ね、該当すると思われるもの全てを選んでもらった。

表 8 に示されるように、生物の種類や棲息環境の水陸の別はまちまちであった。

#### 11) 環境創造型農業に取り組む理由

坂本営農組合の組合員に環境創造型農業に取り組む理由を尋ねた上で、選択肢の中で最も重要と思う理由を選んでもらった。表 9 に示されるように、坂本地区の自然環境や今後の活性化を示す項目、あるいは後継者といった、地域の今後につながるような選択肢を選んでいるインフォーマントが多い。その他の理由として酒造会社の要望

をあげた回答が2件あった。必ずしも環境創造型農業への高い意欲が、組合や地区としての取り組みの動機となっているとまではいえないが、今後の地域の維持に対する関心が背景にあることが伺われる。

### 12) 環境創造型農業の取り組みにおける実感

坂本営農組合の組合員に、環境創造型農業に取り組んでの実感を尋ねた。表10に示されるように、収穫が増えていないことや、十分な収益につながっていないこと、除草の手間がふえたことを実感するインフォーマントが多く、環境創造型農業によって生じる農家の負担を反映しているものと思われる。そして、とくに除草の手間について、負担を感じていることが窺われる。ただし、獣害の増加については、環境創造型農業が理由ではないという聞き取りが2件得られており、注意が必要である。

### 13) 環境創造型農業の取り組みで増えた田んぼの害虫など

8)の設問で田んぼの害虫が増えたと思うとしたインフォーマントに、どのような生き物が増えたと思うかを尋ね、該当すると思われるもの全てを選んでもらった。表11に示したように、カメムシをあげるインフォーマントが目立つほかは、あまり挙がっていない。なお、他の田畑で農薬を使っているので害虫があまり増えないという聞き取りが得られている。

表11 環境創造型農業によって増えると思われる害虫

カテゴリ	件数
アブラムシ	0
イナゴ	4
ウンカ	1
ガガンボ	1
カメムシ	8
ゾウムシ	0
メイガ	0
ヨコバイ	1
ヨトウムシ	2
その他	0

### 14) 公的補助打ち切り後の環境創造型農業への意欲

公的補助が打ち切られた場合の環境創造型農業への取り組みの意欲について尋ねた。表12に示さ

れるように、高い意欲を持つインフォーマントが多いことがわかる。

表12 公的補助打ち切り後の環境創造型農業への意欲

カテゴリ	件数	割合(%)
一人でも続けたい	10	66.7
他の人がやるならば続けたい	0	0.0
やめたい	2	13.3
わからない・無回答	3	20.0
合計	15	100.0

### 15) 環境創造型農業に関して、社会や次の世代への思い

環境創造型農業をおこなってきたことで、社会や次の世代に伝えたい思いを語ってもらった。

「いつまでも有機栽培を地域環境の向上のために続けていって欲しい」、「良いことだと思うので広めたい」、「有機栽培が体に優しい事ははっきりわかったので、あとは後継者がやってほしい。この農法はやったことがある人にしかわからないと思う。有機米を食べていると「よく普

通の米（農薬使用）が食べられるなあ」と思う。今は、労働（雑草除去）や金銭面が苦しい。高く買ってもらえるので、損ではないもののプラスにもならないが、だったらやったほうがいい。高くても苦しくても有機の方向へ変わって、歴史も変わる。有機は人間を救う」、「もっと継続して引き継いでほしい」、「安心して食べるためには必要なこと」、今の坂本の有機栽培がこれからも続いてくれればいい」、「何とか、坂本でやったことが途切れないようにして行ってほしい」、といった声があった。有機農業などの環境創造型農業の取り組み捉え、今後も継続していく必要を自ら訴えているインフォーマントが少なくなかった。また、「農業には村づくりと住民のコミュニケーションが必要である」といったコメントがあった。

一方で、「一番は後継者についてもらえるといいが、コストがかかるという問題もあるので、継がせることが難しい。この負担を軽減する改善を行ってほしい」、「都会へ行った子にも暇なときは手伝ってほしい」といったコメントがあり、後継者問題や環境創造型農業に取り組む際の労働力不足についての声があった。そして、これらのコメントは環境創造型農業の取り組みの持つ意義の高さを前提にして、若い世代への理解を求めているものと思われる。

また、「環境を守るためには有機農業をするべきではあるが、薬も改良され、1回で長持ちするものも増えてきている」というコメントもあり、環境創造型農業に否定的な声もあった。

### (3) 多可町中区坂本地区の営農組合に属さない農家と一般世帯(非農家)における環境創造型農業と地域環境についての意識

#### 1) 調査の実施概要

本調査では、坂本地区の営農組合に属さない農家と一般住民(非農家)37戸のうち、32戸に聞き取りを行なった。

#### 2) インフォーマントの属性

まず、インフォーマントの属性については表13の通りで、高齢者層への聞き取りが中心である。また、聞き取り対象者の性別は、男性17名、女性14名、女性2名の組み合わせが1件であった。

#### 3) 環境問題に対する意識

まず、環境問題への意識を尋ねた。表14に示されるように、多くのイン

表13 聞き取り対象者の年齢

カテゴリ	件数	割合(%)
20歳代	1	3.1
30歳代	2	6.3
40歳代	4	12.5
50歳代	4	12.5
60歳代	9	28.1
70歳代	9	28.1
80歳代	2	6.3
その他 <sup>注)</sup>	1	3.1
合計	32	100.0

注:40歳代女性と50歳代女性である。

表14 環境問題への意識

カテゴリ	件数	割合(%)
とても意識している	9	28.1
意識している	17	53.1
あまり意識していない	4	12.5
まったく意識していない	2	6.3
合計	32	100.0



フォーマントが環境問題に関心を寄せていることがわかる。

#### 4) 地域の環境問題のイメージ

地域の環境問題としてイメージされるものを3つまで選んでもらった。表15に示されるように、ごみ問題や川の水質汚濁といった、一般的な環境問題への関心が高い一方で、農作業に関わりが深いため池の保全や獣害への関心は高くはなく、営農組合加入農家への聞き取り結果との関心の違いが読み取られる。ごみ問題への関心の高さについては、(2)-4)で記した通り、多可町としてごみ分別に力を入れて取り組んでいることが理由として考えられる。

#### 5) 坂本地区におけるモリアオガエルの棲息について

表16に示した通り、坂本地区におけるモリアオガエルの棲息についての認知は、半数強であった。

#### 6) 日頃環境のために心がけていること

日頃環境のために心がけていることについて、「はい」か「いいえ」で選んでもらった。表17によれば、日々の生活の中で環境のための行動をしているインフォーマントが多いことがわかる。ごみ分別をおこなう割合が極めて高い理由は、多可町における取り組みの影響と思われる。生ゴミの堆肥使用をおこなっている割合が、営農組合加入者と比べて低い理由としては、インフォーマントは非農家中心であり、都市的生活スタイルを送っている世帯が多いためと思われる。

#### 7) 食の安全について

食の安全について、関心を持つ事柄について尋ねた。表18によれば、食の安全についての項目に高い関心があるとはいえない。営農組合加入者への聞き取り結果では、食育と食品添加物への関心が比較的高かったが、非加入者と非農家への聞き取りでは、このカテゴリへの関心が低い。

#### 8) 山田錦の環境創造型農業の坂本地区への影響

山田錦の環境創造型農業を実施することによる坂本地区の環境への影響について尋ねた。表19に示されるように、環境創造型農業がおこなわれることで、住民の健康や

表15 地域の環境問題へのイメージ

カテゴリ	件数
ごみ問題	22
川の水質汚染	16
ため池保全	10
里山荒廃	3
人工林放置	1
獣害	7
生種の種類の減少	8
ゲリラ豪雨	4
棚田保全	4
その他	1
何もイメージしない	11

表16 坂本地区におけるモリアオガエルの棲息についての認知

カテゴリ	件数	割合(%)
知っている	18	56.3
知らない	14	43.8
合計	32	100.0

表 17 日頃環境のために心がけていること

カテゴリ	はい	いいえ	無回答
ゴミの分別を行う	31	0	0
冷暖房や家電製品、ガスなどをこまめに消す	27	4	0
洗剤の使用量を減らす	16	9	6
生ゴミを土に返し、堆肥化する	15	15	1
余分なレジ袋をもらわない	25	5	1
バスなど公共交通機関を利用したり、車の同乗を心がける	5	24	2
エコマーク製品や再生紙などリサイクル商品を利用する	19	9	3
環境保護団体などの活動に参加したり、寄付したりする	10	19	2
その他		1	
とくに何もしていない		1	

自然環境へ良い効果をもたらすとしているインフォーマントが多くみられる。また、坂本の知名度の向上の可能性を高く評価するインフォーマントが多く見られる。また、環境創造型農業の取り組みにより、地域住民との連携の可能性も期待できなくはない。

しかし、地域の収入の増加や後継者の出現といった点については、厳しい評価をしていたり、回答を避けるインフォーマントが少なくなかった。環境創造型農業が今後も持続的におこなわれるためには、こうした点は重要な課題であるといえるが、厳しい評価をしているものと思われる。

表 18 関心を持つ食の安全に関することから

カテゴリ	件数
オーガニック(有機)食品	11
原産地	12
残留農薬	13
食育	4
食品添加物	12
食品廃棄	6
スローフード	2
生産者表示	8
地産地消	7
その他	0
特になし	9

#### 9) 坂本地区における環境創造型農業の取り組みについての考え

坂本地区における環境創造型農業の取り組みについて、日頃から思っていることについて尋ねた。19人からコメントを得た。

「いいことである。時代にマッチしている。エコや安全で消費者としては安心だ。山田錦というブランドを伸ばせばいい」、「とても良い事である。そういった環境創造型農業の取り組みをこれからも広めていってほしいと感じる」、「皆が頑張っているし、力を入れているので良い事である。悪い影響もない。ただ、有機肥料が多いので臭い」、「安全で美味しいのが良いと思うし、地元なので応援したい」、「何も思っていないけど、環境を意識することで役場などに関わりを持っていけるから、良い

表 19 山田錦の環境創造型農業をおこなうことによる坂本地区への影響

カテゴリ	はい	いいえ	変わらない	無回答
環境創造型農業により、住民の健康への心配が少なくなると思う	20	4	2	6
環境創造型農業により、田んぼやその周囲で有益な生き物(昆虫・鳥・動物)が増えると思う	19	6	2	5
環境創造型農業により、坂本地区周辺の山や川で有益な生き物(昆虫・鳥・動物)が増えると思う	18	7	1	6
環境創造型農業により、住民が地域の自然環境について考えるきっかけになると思う	17	5	4	6
環境創造型農業により、山田錦による収入が増えて坂本地区が豊かになると思う	7	8	1	16
環境創造型農業により、坂本地区に農業後継者が生まれると思う	8	10	5	9
環境創造型農業により、坂本地区の知名度が上がると思う	26	4	1	1
環境創造型農業により、坂本地区の住民の間で、地域のために活動したいという気持ちが起こると思う	12	11	4	5
環境創造型農業をしない場合と比べ、坂本地区では住民と役場の話し合いが増えると思う	19	2	4	7
その他	0			
何も変わらないと思う	0			

結果につながったと思う」、「いいことだと思う。もっと広げてほしい」、「若い世代に農業をつないでいてほしい」、「農家をしていないからわからないけれど、一生懸命にしてらっしゃるので応援したい。そして村で生産したものが、有名になり、売れて、村全体が潤うような感じになればよい」などといったように、前向きに評価をするコメントが数多く見られた。また、「取り組まれている人は一生懸命ですごくと思う。大変そう」、「良い事ではあるが、手がかかって大変そう」、「無農薬で虫や病気などの世話をするのは大変そうである。労多くして功少なし」などといったように、環境創造型農業の手間を気遣うコメントがあった。

一方、「害虫が増加した」、「いいものができるかも知れんけど、堆肥のニオイを何とかしてほしい」、「有機の肥料、堆肥の臭いが気になることがある」、「有機栽培をしたら、村の利益はマイナスになる。なぜなら労力を多く使うからで、マイナス面は多い。理想と現実のギャップが大きい」といった苦情や批判的なコメントもあった。また、「半ば強制的であり、できれば普通にやりたい。有機栽培は大変であり、兼業ではできない。助成金がなければやっていけない」としたコメントもあった。

不満が多少なりともあるものの、コメントを寄せたインフォーマントのほとんどは

前向きな評価をしていた。

#### 10) 環境創造型農業によって増えると思われる有益な生き物

8)の設問で、環境創造型農業により、田んぼやその周囲で有益な生き物（昆虫・鳥・動物）が増えると思うとしたインフォーマントに、どのような生き物が増えると思うかを尋ね、該当すると思われるもの全てを選んでもらった。

表 20 を、営農組合加入農家への聞き取り結果の集計である表 8 と比べると違いが明確である。営農組合加入農家の場合、実際に水田に棲息している認識する機会が多いためか、坂本地区の水田や生き物調査で観察された生物が示されていたが、表 20 では、非農家の一般世帯が多いためか、カエルなど現実的に増加が顕著に観察される生物が挙げられていないなど、水田地帯に居住する住民でありながら、そもそも身近な水田の生き物への認識が低いことが窺われる。一方、ホタルを挙げたインフォーマントが

半数近くいるが、そもそもホタルが目立つ存在であることや、「農薬散布＝ホタルの減少」といった一般的なイメージのほか、八千代区におけるホタルの里づくりの取り組み（兵庫教育大学・兵庫県北播磨県民局編 2008、pp.30-33）など各地でのホタルに関するイベントの開催などの影響が考えられよう。

表 20 環境創造型農業によって増えると思われる有益な生き物

カテゴリ	件数
アメンボ	9
イトミミズ	7
イナゴ	7
カエル	8
カゲロウ	3
カマキリ	5
クモ	7
ゲンゴロウ	5
タニシ	11
テントウムシ	6
ヒル	6
トンボ	5
バッタ	8
ホタル	15
ユスリカ幼虫	5
メダカ・コイ・フナ	1
ヘビ・マムシ	1
カワニナ・シジミ	1
ほぼ全部	1
わからない・無回答	13

#### 11) 環境創造型農業の影響で周辺環境に生じた変化

坂本地区において環境創造型農業が盛んになったことで、周辺環境に変化が生じたかどうかを尋ねた。表 21 に示されるように、変化がないとするインフォーマントが多数を占めたが、雑草が増えて不満であるとするインフォーマントがやや多く見られるが、このことについては 13)の設問の結果についても考慮することが必要であり、後述する。

#### 12) 環境創造型農業の取り組みで増えた庭や菜園の害虫

11)の設問で田んぼの害虫が増えたと思うとしたインフォーマントに、どのような生き物が増えたと思うかを尋ね、該当すると思われるもの全てを選んでもらった。表 22 に示したように、イナゴ、メイガ、ヨコバイなど、慣行農法では農薬によって駆除される対象となる害虫が挙げられている。

表 21 環境創造型農業の影響で周辺環境に生じた変化

カテゴリ	増えており不満である	増えたが不満ではない	変化はない	減った	該当しない・わからない・どちらともいえない・無回答
お宅の庭や畑・菜園で、害虫が増えたか	5	3	19	0	5
お宅の庭や畑・菜園で、雑草が増えたか	9	2	16	0	5
お宅の畑や菜園で、作物の病気が増えたか	2	2	19	1	8
お宅の庭や畑・菜園で、鹿や猪などの獣や、鳥による食害が増えたか	7	3	14	1	7
坂本地区では蛾やクモが増えたか	2	5	16	3	6

13) 環境創造型農業の取り組みに対する評価

坂本地区における山田錦の環境創造型農業の取り組みに対する評価を尋ねた。表 23 に示されるように、ほとんどのインフォーマントが前向きな評価をしている。

14) 県や町による環境創造型農業への取り組みについての認知

県や町が環境に配慮した農業（環境創造型農業）に力を入れていることが認識されているかどうかを尋ねた。表 24 に示される通り、ほとんどのインフォーマントがこのことについて認識をしていた。

15) エコファーマー制度の認知

エコファーマー制度の存在が認識されているかどうかを尋ねた。表 25 に示したように、インフォーマントの半数以上に認知されておらず、詳しい内容は知らないとしたインフォーマントを含めると、あまり知られていないといえる。

表 22 坂本地区における環境創造型農業によって庭や菜園で増えた害虫

カテゴリ	件数
アオムシ	3
アブラムシ	2
イナゴ	8
ウンカ	1
ガガンボ	0
カメムシ	4
ゾウムシ	1
ナメクジ	3
バッタ	2
メイガ	8
ヨコバイ	8
ヨトウムシ	1
その他	5
無回答	24

16) 自家用の野菜栽培の経験

インフォーマントの世帯で自家用の野菜を作ったことがあるかどうかを尋ねた。表 26 に示されるように、ほとんどのインフォーマントの世帯で野菜栽培の経験があった。

17) 自家用野菜を減農薬・有機で栽培したかどうか

16) の設問で「作ったことがある」を選んだインフォーマントに、自家用野菜を減農薬あるいは有機で栽培したかどうかを尋ねた。表 27 に示されるように、ほとんどのインフォーマントが自家用野菜を減農薬・有機で栽培したことがわかる。

18) 自家用野菜を減農薬・有機で栽培したかどうか

17) の設問で「はい」を選んだインフォーマントに、現在も自家用野菜を減農薬あるいは有機で栽培したかどうかを尋ねた。表 28 に示されるように、ほとんどのインフォーマントが現在も自家用野菜を減農薬・有機で栽培していることがわかる。

ここで「はい」と答えたインフォーマントに何年前から減農薬・有機で栽培しているかを尋ねた。表 29 に示されるように、最近取り組んだインフォーマントもあれば、ずいぶん前から取り組んでいるインフォーマントもあり、まちまちである。

19) 有機栽培の講習会を坂本地区で開催した場合の参加の意思

野菜の有機栽培の講習会が坂本地区で開催された場合の参加の意思を尋ねた。表 30 に示した通り、半数強が参加の意思を有している。

表 23 坂本地区における環境創造型農業の取り組みに対する評価

カテゴリ	件数	割合 (%)
よい取り組みだと思う	27	84.4
よい取り組みとは思えない	0	0.0
わからない・関心がない	5	15.6
合計	32	100.0

表 24 県や町による環境創造型農業への取り組みについての認知

カテゴリ	件数	割合 (%)
知っている	17	53.1
聞いたことがあるが詳しい内容は知らない	7	21.9
聞いたことがない	8	25.0
合計	32	100.0

表 25 エコファーマー制度の認知

カテゴリ	件数	割合 (%)
聞いたことがあり、詳しい内容を知っている。	3	9.4
聞いたことがあり、だいたいの内容を知っている。	3	9.4
聞いたことはあるが、詳しい内容は知らない。	7	21.9
聞いたことがない。	19	59.4
合計	32	100.0

## 20) 坂本地区における環境創造型農業の取り組みに対する期待

坂本地区における環境創造型農業の取り組みについて、日頃から思っていることについて尋ねた。

「自分がしていなくて分からないから何も言えないが、今の有機栽培を続けてほしい」、「安全でおいしいものを作ってくれたら良い」、「有機栽培が広まっていくことを期待したい」、「有機栽培を継続してやっていって欲しい」、「今、頑張っているのでやめずに頑張してほしい」、「住民全体が意識した上で環境社会になればいいと思う」、「有機栽培で生産性が上がって豊かになればいいと思う。農業している人が豊かになれば波及効果が期待できる」、「坂本をもっと広めてほしい。そして山田錦を全部有機栽培でやってほしい。全部を有機栽培でしてしまうと、虫が増えてしまうが、それでも広めてほしい」、「難しいと思うが全ての取り組みができることを期待する」、「環境創造型農業が発展していくことを期待する」、「知名度の上昇の効果を期待する」といった前向きな内容のコメントが多数聞かれた。また、「一部ではなく、地区全体へ広げてほしい」、「村全体で一緒に取りくみたい。有機栽培の人も農薬を使っている人も、減農薬でやっている人もいるけれど、みんな農業を統一して、有機栽培でやると全体がまとまるのではないか」などといったように、肯定的な提案も見られた。

一方で、「農業をする場合、作る本人が食べ物の大事さをどれだけ思っているか。感じた人がやる。したい人が農業をする。義務的に農業をやっではいけない」、「非農家に迷惑がかからないようにやってほしい。臭いなどについて」、「農業をしている人に期待したいけれど、天災とかどうにもならないこともある」、「村の有機栽培に期待したら村がつぶれる。破たんする。有機栽培はいいことだが若い人にその意志がない」、「期待してない！作るだけで満足か！作りただけなのか、それとも売って広めていきたい

表 26 自家用の野菜栽培の経験

カテゴリ	件数	割合 (%)
作ったことがある	31	96.9
作ったことがない	1	3.1
合計	32	100.0

表 27 自家用野菜を減農薬・有機で栽培したかどうか

カテゴリ	件数	割合 (%)
はい	26	83.9
いいえ	4	12.9
わからない	1	3.2
合計	31	100.0

表 28 現在も自家用野菜を減農薬・有機栽培で作っているかどうか

カテゴリ	件数	割合 (%)
はい	24	77.4
いいえ	5	16.1
わからない・わからない	2	6.5
合計	31	100.0

表 29 現在も自家用野菜を減農薬・有機栽培している場合、何年前からか

カテゴリ	件数
5年以内	6
6～10年前から	5
11～15年前から	2
16年前以前から	8
判断不能・わからない	3
無回答	2
合計	26

のか分からない」といったように、少数ではあるが批判的な意見もあった。

#### 4. おわりに

これまで坂本地区で営農組合に加入して環境創造型農業へ取り組む農家、および、営農組合に属さない農家と一般住民（非農家）における、地域環境や環境保全型農業に対する意識について明らかにしてきた。

その結果、まず、営農組合に加入して環境創造型農業へ取り組む農家の場合、地域環境への関心が比較的高く、環境創造型農業の取り組みによって収入の増加につながることを期待する人は少なく、補助金がなくなっても続けたいとする意欲を持つ人が多いほか、取り組む環境創造型農業が地域の環境により効果をもたらすことを期待したり、地域の活性化や後継者の育成に期待する人が多い。

一方、営農組合に属さない農家と一般住民（非農家）の場合も、地域環境への関心が高い人が多く、坂本地区で行なわれている環境創造型農業に対して良い印象を持っている人が多いことがわかった。ただ、そうした印象はどちらかというところにとどまっている人が少なくないものの、坂本地区の農家が取り組む環境創造型農業が地域環境により効果をもたらすと感じている人が多いように見受けられた。また、こうした取り組みが地域環境のみならず地域社会にプラスの効果をもたらすと考えている人もあった。

環境創造型農業に取り組む農家にとって、同じ地区内で多数を占める非農家住民は、もっとも身近な非村落住民、いわば都市的住民である。彼らが環境創造型農業に取り組む農家に対して、直接的な支えとなったり後押しをしたりすることは期待できまい。しかし、農家に対して、非農家である一般住民による他者としての眼差しで地域において実践される環境創造型農業が見られることにより、少なからぬ農家がそれを意識して農業を続けることになろう。そうして生じる緊張感と理解は、手間のかかる作業を必要とする環境創造型農業の持続を促すことが期待される。そのためには、農家と非農家が定期的に地域環境や環境創造型農業についての対話や交流を行ない、積極的に理解し合う関係を構築していくことが肝要である。これにより相互理解の欠如による不信感や問題の発生を防ぎ、環境創造型農業を基軸としたよりよい地域環境の実現へのつなげていくことが望まれる。そして、それが地域全体の振興のステップとなる。

なお、伊賀（2008）は、酒米のショートフードサプライチェーンが地域経済・社会に与える影響について、参加主体へポジティブな効果をもたらしうることと指摘している。また、個別の取り組みが面的に拡大するためには、いくつかのショートフードサプライチェーンが緩やかなネットワークで結びつけられ、その総体が地域活性化へとつながるようにしていく必要があると指摘している。筆者は、このネットワークには、ショートフードサプライチェーンに各種の地域環境活動も加えられるべきであ

表 30 有機栽培の講習会が坂本地区で開催された場合の参加の意思

カテゴリ	件数	割合(%)
はい	15	46.9
いいえ	12	37.5
どちらともいえない	5	15.6
合計	32	100.0



ると考える。環境創造型農業を地域環境活動の一つとみなすと、視界はさらに広がりを見せるものと考えられる。人口が少なく、市場規模も小さい中山間地域においては、可能な限りの連携が肝要である。環境創造型農業の取り組みは、地域で展開している地域環境活動や環境ビジネスと広く緩やかに連携することで、地域全体による環境創造型農業への取り組みにつながっていく余地があり、中山間地域の比較的濃密な地域社会における地域活性化の後押しとなるだろう。

現在の多可町域においては、八千代区におけるクラインガルテン、加美区における岩座神地区の棚田保全活動、加美区における間伐材活用の取り組みなど、山田錦の環境保全型農業と連携が可能な地域環境活動やビジネスが存在する（人文地理学会「公開セミナー企画委員会」編 2007、兵庫教育大学・兵庫県北播磨県民局編 2006、宮崎編 2006）。こうした広い連携による地域住民自身の意欲の高まりが、真の地域活性化のための課題と考える。地域環境という課題はそのための動機として充分成り立ちうる。

#### <注>

- 1) 酒米は日本酒の原料となる醸造用玄米のことで、農林水産省の品種別栽培面積統計で、醸造用玄米（酒造好適米）として普通米（食用米）とは品種として区別されている（横尾 2009、p.38）。
- 2) 第1位は五百万石で 28.9 万 ha、同 30.7%である（横尾 2009）。
- 3) ただし、横尾（2009）は栽培面積の統計に上がってこない酒米品種があることを示唆しており、数値そのものが実態を示しているとはいえない。
- 4) 多可町は西脇を中心とする播州織の生産地域であり（石田ほか監修 1994、p.191）、農家の副業として行なわれていたことが、この調査の準備段階における聞き取りで得られているが、播州織自体の生産が縮小するなかで、多可町における生産も衰微している。
- 5) 農業集落カードデータによれば、2005 年の販売農家数は 21 戸である。
- 6) おもに 2009 年 5 月 15 日、7 月 21 日・24 日に、坂本地区区長の定本 清氏、坂本営農組合代表理事の浅田利弘氏に対しておこなった。
- 7) 大規模実践地区の場合、10 アールあたり 3 万円が、環境保全のシンボルとなる動植物を守り育てるべく、環境に配慮した農業を営むための委託費として支給される。
- 8) 地域社会学分野として、2009 年 12 月 11 日に福光屋本社において、常務取締役の川口俊雄氏に対して行なった。

#### <文献>

池上 勝（2008）「酒米品種の特徴と生産状況」寺嶋秀明・春日雅司編『阪神・淡路大震災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究報告書第 31 号 文化人類学・地域社会学分野ワークショップ記録集』神戸学院大学地域研究センター、pp.19-31.

伊賀聖屋（2008）「清酒供給体系における酒造業者と酒米生産者の提携関係」地理学評論 81-4、pp.150-178.

石田善人・落合重信・田中眞吾・八木哲浩監修（1994）『兵庫県風土記』旺文社.

- 井上寛和（1986）「兵庫県下「山田錦」酒米地域の研究」水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』大明堂、pp.549-559.
- 井上守正（2008）「兵庫県内の酒蔵の近況と今後の課題」寺嶋秀明・春日雅司編『阪神・淡路大震災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究報告書第31号 文化人類学・地域社会学分野ワークショップ記録集』神戸学院大学地域研究センター、pp.32-43.
- 奥平三之編、博文堂制作（2001）『雪国の酒蔵—とっておきの85選』能登印刷出版部.
- 小泉武夫監修、柴田書店編集部編（2000）『日本酒百味百選』柴原書店.
- 国税庁課税部酒税課（2010）「酒のしおり」  
<http://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-gaikyo/shiori/01.htm>
- 酒類総合研究所（2009）『平成20酒造年度 全国新酒鑑評会の審査結果について』  
<http://www.nrib.go.jp/kan/kaninfo.htm>
- 人文地理学会「公開セミナー企画委員会」編（2007）『第7回公開セミナー「文化的景観の意義と保全」』人文地理学会.
- 田中眞吾編著（1993）『播磨の地理人文編—町と産業と交通路』神戸新聞総合出版センター.
- 東条山田錦冊子編集委員会編（2006）『東条の山田錦—日本一の山田錦ができるまで』東条山田錦フェスタ実行委員会.
- 中町史編集委員会編（1991）『中町史本文編』中町.
- 橋本行史（2008）「「村米」の復活と酒米地域の活性化」春日雅司（地域社会学分野）編『阪神・淡路大震災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究報告書第32号 地場産業の活性化と地域社会—殿畑営農組合調査を中心に』神戸学院大学地域研究センター、pp.91-111.
- 福政宗物語編集委員会編（1987）『福政宗物語』株式会社福光屋.
- 兵庫教育大学・兵庫県北播磨県民局編集発行（2006）『北播磨地域学習フォーラム報告書 北播磨の魅力を拓く—豊かな自然との共生 平成19年度』.
- 松田松男（1989）「最近における酒造業の地域構造に関する若干の考察」経済地理学年報35-3、pp.65-78.
- 宮崎 猛編（2006）『日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズム—地域経営／体験重視／都市農村交流』昭和堂.
- 宮地忠幸（2007）「日本における有機農業の展開と地域農業振興」経済地理学年報53-1、pp.41-60.
- 八千代町史編纂室（2007）『八千代町史本文編』多可町.
- 横尾政雄（2009）「栽培面積でみる近年の酒米品種」農業技術64-9、pp.38-41.